

序

第二、三次産業はとくに産業革命以降において世界諸地域の変貌の基盤をなすものとなり、その地理学における意義は極めて重要なものとなつてきていることは周知のことくである。しかし、鉱・工・商業をそれぞれ別個の社会現象としてとらえ、地理学ではそれぞれの分布、立地、生産状況などを調べ記述することでその職能を十分に果し得るものといえるであろうか。地理学として最も注目すべきことは、それらが地域の事象としていかなる意義をもち、地域の変化・発展、地域性の形成にいかなる役割を果しているかということである。そしてたんに統計数字の上での現象面からの把握のみならず、それを地域における人間の営みとしてとらえ、地理的環境や歴史的・社会的諸条件のうちににおける人間活動の表現として考察することである。したがつてそれは地域の諸問題、人口、集落、交通、第一次産業、社会、経済、政治、文化などと密接な関連のもとにあることを理解しなければならない。

それはまた当然、人間活動の表現として歴史的過程においてもとらえられねばならぬ。地域にお

けるその意義も、地域変動の中におけるそれら事象のもつ意義を考えることによつてはじめて理解し得るものである。

第一次産業を中心とする第十一号に続き、本年は第二、三次産業を中心とする生産の歴史地理を主題とした第十二号紀要を刊行し得たことを会員諸兄姉と共に喜びたい。そしてわれわれはここに掲げられた幾篇かの論説を通じ、歴史地理学における第二、三次産業のもつ重要性を改めて考えてみたい。それはまた、いよいよ盛大にかつ重要になりゆく第二、三次産業の将来のあるべき姿の予測を可能ならしめるとともに、それら諸事象を重要な基盤として変貌しゆく諸地域の未来像をもそれから描き得るからである。

一九七〇年三月

中 田 栄 一